
鎧神慨装 カイザリオン

不良品

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎧神慨装 カイザリオン

【Zコード】

Z3252J

【作者名】

不良品

【あらすじ】

夜剣廻。高校2年の一少年。彼のもとに突如として現れた一体の魔人。それは『鎧神慨装』と呼ばれる、神のような存在だった。

降臨（前書き）

無謀にも連載挑戦。

この次元には幾重の可能性と世界、歴史によつて作られている。そこにはエフが存在し、いくつもの分岐点より派生した世界がある。次元を跳躍し、あらゆる事柄を凝縮した存在、鎧神慨装。この物語はその鎧神慨装から繰り広げられる、物語・・・。

朝。煩い小鳥のさえずりと、カーテンの隙間から漏れ出る日を焼くような日差しによつて、少年は起きる。といつても時刻はまだ午前4時。健康的な老人の起きる時刻。高校2年生なのに寝るのは9時半（夜の、である）、10時まで起きるなどもつての外、という少年。今時の小学生でも、そんな時間に寝ない。

ベッドから起き、頭をかく。枕は足の位置にあり、寝たときは正反対の向きになつていたのだと、その時彼は気がついた。寝像の悪さは誰に似たのか、と他人事のように考える少年。

その名を夜剣^{やつるぎ}廻^{かい}。この物語の一応の主人公である。だが、主人公と言つても、根暗でメガネでチビで生意氣で・・・と、万人より好かれる好少年ではない。自称やる気なしのリアリスト。

さて、こんなに朝早くより何をするかと言えば読書である。インターネットなど、彼はしない。音楽、ファッショն、テレビなど彼には無用のもの。ただ、本を読むのが彼の趣味なのだ。友人たちには面白げのない人生と言うが、本人曰く、

「至高の時間」

だそうで、何者も彼の読書を邪魔はできない。

そういう説明している間に時刻は7時。廻は朝食をとり、顔を洗い始めている。小説ではありがちなひとり暮らしだが、別段特別な理由はない。ただ、両親から高校の通学のために離れて暮らしているに過ぎない。

一通り準備をしたら部屋を出る。マンションの一室、4階から1階まで階段を猛スピードで駆け降り、マンション横の自転車に跨り、ペダルに足をかける。そして、街に繰り出す。

県立水瀬高校。それが廻の通う高校だ。生徒数は700人。都会とまでいは無いが、そこそこ人口のある三上崎市。県内一、二を争う進学校があるこの街に来る生徒も少なくはない。廻は後期試験でなんとか転がり込んだ。僕倖、僕倖。と、当時は喜んでいた。（理由としては県内最大級の図書数を誇るから）

校舎に入り、彼は自分の教室、2年3組に入る。そして、自分の席に座り本を広げ、ようとして本がぼつたくられる。視線をずらすと、自分より若干背の高い女子生徒、ナツキ・エリクセンが立っていた。所謂幼馴染（腐れ縁ともいう）だ。

「あんたねえ、いつまでそんなんでいるのよ」

呆れたように彼女は言う。彼にとつては迷惑以外の何物でもない。「エリクセン、僕にとやかく言うのはやめてくれ。僕と君は単なるクラスメイトなんだから」

彼の言葉に、彼女は俯き、トボトボ自分の席に帰っていく。そこに女子が寄ってきて雑談が始まると、彼女は何事もなかつたかのように会話に入つて行つた。

「そう、何事もないのだ。」

虚無の感情が廻の中に明滅する。こんな日常のなかでも、廻の存在に関係なく世界は回る。果たして自分に存在の意味があるのか、と彼は感じていた。何事にも満たされず、他者との交流を避け、孤独に生きる。

今日も世界は彼なしに動いていく、かのように思われた。

だが、世界はそれを赦さない。廻を生け贋に物語は急転していく。

5月13日。突如、全世界において地震が発生した。あり得ない規模の大地震は三上崎市においても発生した。夜の日本では、寝起きの人々があわてて外へと繰り出していた。それは夜剣廻も例外ではない。彼は冷めた目で状況を判断し、しかし人の流れに任せよう歩いていた。揺れはもう収まっていた。だが、何かがおかしい。そして。

突然、空より光が走る。落雷のような、だが大きな柱のようなものが、三上崎の山を消滅させた。空の光によつて斬られた雲より、巨大なナニカが降つてきた。

生命体と思わしきフォルム。金に輝くその体は天使や神を想像させる。だが、誰の目にもそれは悪魔でしかなかつた。全長12メートルほどの悪魔は口らしきものを開けると、再び光を放つ。それは廻のいる方向にやってきて。

遮られた。

次元が歪み、その歪みの中に光は消えた。迸るスパーク。鳴り響く唸り。警戒する悪魔。歪みは広がり、一体の魔人が現れた。全長10メートル。黒と黄色で構成された体。生命体を思わせるものの、どこか機械的な体。悪魔のように禍々しく映る大きな角。光りなき眼球。

「なんだって言うんだ、これは・・・！」

廻は混乱していた。およそ彼には似つかない表情。そんな彼の脳裏

に響く声。

『汝は選ばれた。刻は満ちた。万象を司りし要素は今、崩壊し、この宇宙、そして全ての次元世界に終末が近づいている』

「なん、だ・・・お、前は・・・！」

脳裏に響く声と共に来る頭痛。それに耐えながら彼は言った。

『我が名はカイザリオン。何者にも囚われぬ、次元の管理者、鎧神慨装。そして、汝の剣となり、盾となろう!』

気づくと彼は見たことのない空間に居た。だが、直感的にここがどこかわかった。あの、鎧神慨装の中だと。情報が彼の頭をよぎる。膨大な情報。その中から、あの天使の情報を見つける。

『ウルゴリエル。次元世界の破壊者、ヴァーウルの僕』

ちくしょう。何かわからないがやるしかない。廻は叫ぶ。

「行け、カイザリオン！」

『了解した。我が主よ』

黒い巨体は光る天使に駆ける。両腕より、粒子ビーム状の刃が現れる。廻は、カイザリオンはそれを振り上げ、天使を切り裂く。血のような縁の液体を撒き散らし、天使・・・ウルゴリエルはその手に備わった爪でカイザリオンを貫く。

貫かれた場所は次元の歪みができるで、カイザリオンにダメージは無かつた。

『トドメだ、ギヤザツシユカノン！』

ビームの刃は消え、カイザリオンは後退する。両の手を合わせ仁王立ちする。スパーク。その後、手を振り上げ、ウルゴリエルを捉える。

直上の光線が一本、天使の体を貫く。天使は肉体を溶かし、絶叫して果てた。

後には静寂の街と一体の鎧神慨装が残つた。

降臨（後書き）

カイゼルブレード・・・カイザリオンの両腕に備わる、粒子ビーム状の近接武装。両腕より分離し、手に持つて剣としても使用可能。ギヤザツシユカノン・・・両手より発生させる、高次元エネルギー光線。現状のカイザリオンの最強武器だが、カイザリオンの消耗も激しく、連射は不可能。

ナツキの想い（前書き）

短いです。

ナツキの想い

私、ナツキ・エリクセンは夜剣廻に恋をしている。いや、これでは語弊がある。私は彼を愛している。きっかけは忘れた。幼稚園から今まで、ずっと一緒にいた。彼が中学の時に周りと距離を置き始めるまで、私たちは仲の良い友達だった。時は私と彼の間に溝を作つたけれど、私の想いは強まるばかりだった。今、この時も。

5月14日。廻が学校を休んだ。誰もが廻のいない日常を過ごす。そもそも廻が元々いないように彼の話などしない。教師でさえも。寂しい。仕方がないけれど、寂しい。だから、せめて私だけでも彼を思い続けなければならない。

それは私の使命のように。けれど、それははつきりした意思。誰のものでもない私だけの。

放課後。私は彼の住むマンションに行く。四階の407号室。そこが廻の居場所。けれど、私は向き合つ勇気がなくて。逃げ出した。きっかけなしに私は前に進めない。私は弱いから。

迫り来る運命を私はまだ知らない。

ナツキの想い（後書き）

鎧神慨装・・・単独での次元転移を可能とする、機体群の総称。とは言うものの、鎧神慨装自体が未確認の存在、オーバーテクノロジーであるため、実質カイザリオンの通称である。ちなみに「慨」とは大いなる意思の意味である。

カイザリオン・・・形式ナンバー T.O. + 。材質、エネルギー、開発者全てが不明の機体。機体自体に意思があるが、それがAIかは不明。単独での次元転移可能。主な武装はカイゼルブレード、ギヤザツシユカノン。搭乗者は夜剣廻。

狂う「僕」

5月14日早朝。起きると僕は部屋にいた。昨夜のことは今でも覚えている。普段は見ないテレビをつける。昨夜の全世界自身は不思議なことに被害は出なかつた。

ここ三上崎以外は。

あの後、どうしたかは知らないが、僕はここに居て、山も消滅している。しかし、外に出て見ても、特別警戒もされていない。何故か。

『それは次元の干渉であろう』

脳裏に響く奴、カイザリオン。鎧神慨装とかいう奴。昨夜は奴とリンクして、脳に情報と言つ情報が厭と言つほど流れ込んだ。

「お前の言つ、大いなる意思か」

『左様。次元に干渉せし不穏分子又はその被害を元に戻す、ということだ。もつともそれも今ではあまり働いていないがな』

取り敢えず、状況をまとめよう。

僕はこの鎧神慨装に「搭乗」し、天使を殺した。天使は次元破壊者の僕であり、この次元を破壊しようとした。僕はどうやら、選ばれた（カイザリオンの言う大いなる意思に）。どうやら僕の役目はこいつに乗ることらしい。曰く、鎧神慨装と言つても、所詮ロボット。操縦者なしには満足に動けないらしい。確かにこんな兵器がヒトなしに動いたら、この世界のバランスは崩壊だ。詳しいことはまだ分からぬが、

「今日は休むか・・・」

取り敢えず、今は眠りたい。

ところが、だ。

『すまぬが主よ。この次元に飛来する物体を感知した』

僕は起きざるをえない。カイザリオンの次元転移により、僕の体は世界を超えて、次元を超えた。莫大な情報にあてられて、僕もおかしくなったのか。いや、カイザリオンと体を共有しているのか。

空間の中で魔人は浮遊する。すると空間に切れ目ができる、中より異物が出てくる。

「破壊者の僕、金の体を持つもの、ケツアリースト」

蛇にも似た頭部をもつ機械の化け物。それを見ても僕は何とも思わない。麻痺している、思考が。頭が。僕は腕を動かす。リンクするように巨人もそれに合わせて。

ブレードを起動せん。

תְּלִינוּתָה

唸る刃をその頭部に叩きつける。緑の鮮血。悲鳴。口を両手で力強く開いた。そして、それを裂く。冷酷に僕は奴の

怪物の、絶叫。それを見つめる、赤き瞳。顔を血から底うように腕で覆う。僕はただ、それを見る。

次元を超える怪物たちを誰が統べるのか。

統治者、ヴァーヴル。その目的は次元の統一。その正体は不明

肯定の意を返すカイザリオン。

「柄じゃない。」「いや、それでいいや。」

そう言ふと、カイサリオンは廻を元の次元に帰した。

気がつくと、廻は夕闇に染まり始めた空をマンションの部屋から見ていた。ふと、視線を落とし、階下を見る。

彼女だ。

赤茶がかつた短い髪を風に揺らし、マンションに立つ、幼馴染。

ナツキ・エリクソン。

僕はたぶん、彼女が好きなのだろう。

だから、僕は彼女を遠ざけたいのだ。

矛盾した考え方。されど、彼はそれを貫く。それは贖罪。

中学入学直前。彼とナツキの間にあったこと。彼女も、誰も知らない、彼だけの記憶。

「俺はナツキを殺したんだ・・・」

その時、既に運命は狂い始めていたのかもしれない。

狂「う」僕（後書き）

ウルゴリエル・・・形式ナンバーXXX-1233。ヴァーウルたち次元破壊者の使う量産機。天使と思われる外観。武装は口内に装備された加速粒子砲。

ケツアルゴス・・・形式ナンバーXXX-1245。量産機。偵察・潜伏用の機体で光学迷彩等の装備を持つ。戦闘能力は皆無。

春のある日、

春。中学入学を目前とした、肌寒い朝。僕は彼女と公園に居た。僕より、少し背の高い、赤茶の髪を肩に揺らし、僕に微笑む彼女。それを受け流す僕。

ひょんなことから、ある山（今では消えた三上崎山）に一人で行つた。確か彼女がこの街を一望したい、と言つたのだ。それぐらいなら、いいだろう、と僕は思った。

僕が自転車をこぎ、彼女が荷台に座る。何かの青春映画か、と思ひながらも、僕は幸せだった。

山の頂上。一望できる街は小さく感じた。僕の家は街の中心から離れている。水瀬高校は歩いても2時間はかかる、そんなところに僕の家はある。

彼女が言つた。

「普段広いと思つ世界も、ちつぽけなものだね。でも、そんな中にも私たちはひとりひとり意思を持つて暮らしている。今を生きようとしている。それつて、素晴らしいことよね」

彼女は、たぶん、この日常が大好きで。愛おしくて。僕にはそれが喜ばしく感じられる。

「ね、キスしようか」

唐突な、彼女の言葉。僕は固まる。

沈黙。その後、ゆっくりと動く僕。縮まる彼女との距離。そして・

・・・

事件は帰り道。僕の後ろに乗つっていた彼女があるものを見つけたのだ。洞窟。幼い冒険心と好奇心が僕らの歩を進める。引きつけられるように。体は奥へと向かっていく。何かが導くように、何かを追うように。奥への道には、謎の文様があった。文字にも似たそれ

を不思議に思いながらも、僕らの足は止まらない。

1時間は、歩いただろつか。光が先から零れる。僕たちは走った。走つた先に。

いたのは・・・。

鎧神慨装。

そう、今、思い出した。何故、忘れていた。僕は一度、鎧神慨装を見ていたのだ。カイザリオンとは違う、鎧神慨装を。

スパークと共に、跳躍してきたそれは、僕らに紅く光る瞳・・・。僕には血走っているように見えたのを、僕らに向けて。ナツキが倒れた。

僕は彼女を呆然と見る。そして、よぎる数々の思い出。山の頂上、誰も見ていない二人だけの世界で、キスする一いつの影・・・・・。

世界が歪む。その瞬間、僕の世界はぼくを中心に崩壊していった。崩壊した世界には、僕と奴。

『その痛みを忘れるな

響く声。

『過ちを、犯すな

『彼女を失くしても、君は使命を果たせ』

『さもなくば、君自身が君の倒すべき敵となる』

『忘れるな、そして、刻め。己の運命を』

気づいた時には洞窟は無くて。僕もナツキも生きていて。でも、僕は彼女を殺してしまったのだと、思いこみ、彼女を自宅に送つて、それから、僕は。

誰も寄せ付けないことを決意した。何よりも大切な彼女を傷つけないために。

永久に続く、螺旋に少年は閉じ込められる。その先にあるのは、絶望への誘い・・・。

春のある日、（後書き）

夜剣 回・・・主人公。高校2年生。17歳。身長は160?に満たない。趣味は読書。友人は皆無であり、孤独を貫き通している。カイザリオンの搭乗者にして、物語の鍵。今後、彼のたどる運命はいかなるものなのか・・・。

放課後。僕はさつさと家に帰りたかった。連日の戦闘は誰にも知られることなく、過ぎ去っていく。勿論疲れないわけがない。気だるい。だから、さつさと帰つて次の戦いに備えたい。だというのに……。

彼女は僕を「王立ちして通せんぼするのだ。彼女とは、勿論ナツキ・エリクソンだ。勝気な顔して僕を見る。

「今日は逃がさないんだから」

今まで逃げてきた、ツケか。その目は獲物を狩る猛禽類の目だ。あきらめる僕。いつだつて彼女は僕に勝つのだ。

「・・・何の用だ」

「あんたさ・・・何か隠してない?」

彼女の射抜くような目。

「ないよ・・・僕には・・・」

「嘘ね。わかるわ」

「何がわかるって言うんだ。僕のことが・・・」

「わかるわよ。だつて、ずっと・・・」

「異なる歴史、異なる過程を経ても、変わらぬものか。これも宿命か・・・」

僕とナツキのすぐそばに一人の男。黒髪に黒コート。サングラスで目は覆わっていた。

「夜剣廻。見せてみる、その決意を」

歪む空間。

「貴様だけが、鎧神概装を使えるわけではないことを、教えてやろ

う」

「ナツキッ！！」

僕はその手を掴み、叫ぶ。

「カイザリオン！！」

『御意』

瞬間、僕たち二人を乗せたカイザリオンと、もう一機の鎧神概装は、異次元にいた。

「何、ここー？」

「黙つていろ、ナツキ！舌をかむぞつ」

しゅんとするナツキ。口を閉じる彼女を見て、僕は目前の敵に集中する。

「申し遅れた。我が名はナイトブレイド。そして、この機体の名は・・・」

白い機体。顔は違えど、その造形はカイザリオンに似通つていた。

「『鎧神概装』アルクオーネ。参る」

一瞬で迫る、敵。腕より、ビームの刃が伸びている。

「ツ！！カイゼルブレード！！」

寸でのところで受け止める。そして、斬り返す。それを難なくかわすアルクオーネ。

「どうした？動きが遅いぞ。そんなものか？」

敵の手に、巻き起つるスパーク。

「ならば、この一撃で消し去ろつ。永き螺旋に終止符を打ち、深き絶望を・・・」

迸る波動。次元を破壊せんとする、力。

「ギャザツシユマグナム・・・！消え去れえええいい！・・・」

まだ、終われない。決めたはずだろ？ナツキを今度こそ守るつて。

「ナツキ」

こちらを見る、彼女。混乱していることが、よくわかる。
「守つてやる、だから何も言つな」

「行くぞ、カイザリオン！」

『御意』

『「ギャザッシュュカノン！…！」』

ぶつかる、二つの力。互いにスパークを奔らせ、空間を歪めていく。
やだて二つの力はどちらともなく、消滅した。

「フフフ、まだ、終わぬか。だが、覚えておくがいい。貴様に待
つてるのは絶望。死よりも深き絶望よ…。選択の日は近い」

光り輝く、アルクオーネ。

気づけば、僕らは元の場所に居た。

「何、今…？」

「わかつたろ？僕に、関わるな」

強い拒絕を込めて言い放つ。彼女の顔を見ずに僕は岐路に着く。い
や、怖かったのだ。彼女の顔を見るのが。

忘却の世界。そこは、全てが終わってしまった。ただ一人を残して。ナイトブレイド。彼にとつて、ここはかつての自分の生まれた世界であった。そこに郷愁の感情はない。ただ唯一残った激情が彼を動かす。彼を彼たらしめる所以が。

「何故、取り戻そうとする。世界を、滅ぼしてまで」かつて、この世界が滅びを迎えた時、それは言った。
「貴様も、同じ存在ならば、わかるだろう? あれだけが私をこの世界に繋ぎ止めるものだ、と」

私はそれを見た。

「だから、貴様は死ななければならぬ。私のため、何よりも彼女のために」

諦めたようなその顔。

「いいだろう、ここで果てるのも。だが、覚えておくことだ。いつか必ずこの螺旋は終わる、といふことを」

「さうばだ、この世界の〇〇〇。願わくば汝の魂に救済があらんことを」

魂の救済などない。私は咎人。貴様に救いが無いように、私にも

また・・・。

「行くぞ、アルクオーネ」

次元はいくつも存在する。可能性の数だけ、その世界は分岐する。ならば、同じ存在もまた、次元毎に存在する、ということなのだ。本来、交わらぬ定めの世界。その世界を歪めてしまったのは何者なのか。

ヴァーウル。次元破壊者。ナイトブレイド。アルクオーネ。そして、カイザリオン。

世界を越えてくる、存在。悠久の螺旋。宿命。どこから、この戦いは始まったのか？

それは誰も知ることはない。知るものが居るとすれば、

それは神なのだろう。

終わらない宿命。逃れられぬ闇。

虚無（後書き）

この時点ではナイトブレイドが何なのか気付く人も多いこと思います。

少年と少女

僕は学校に行きたくなかった。昨日の今日で、どんな顔して彼女に会えればいいのか、わからない。僕は臆病者だ。取り敢えず、今日は休もう・・・そう、思う僕にインターの音・・・開けるとそこに

彼女が居た。

僕はカイザリオンに乗つて逃げたくなつた。

何故かこうなつた。正座して向かい合つ僕とナツキ。座つていても、若干彼女の方が背が高い。男として、この身長はどうなのか、と思う。しかし、そんなことはどうでもいい。

「・・・学校は」

「ああ、今日は休むわ」

・・・。

「聞かせてもらひわよ。今日こなは、ね」

「関係ない」

「なくなんて、ないつ！――

パンツ。

彼女の手が床を叩く音。しかし、僕には彼女がその日から、涙を零していたことに驚いた。

「いつも、昔っから、そうやつて・・・誤魔化して・・・私がどんな思いをしてきたのか、わかる！？」

若干ヒステリックに言う彼女。そんな彼女は愛おしい。自分にこの感情は似つかわしくないと、僕は思った。できれば、気づきたくはなかつた。いや、ずっと昔から知つていた。

僕は彼女が好きで、彼女も僕を好きで。そう、それは定められた宿命のように、絡み、結びつく。

「落ち着いて聞いてくれ」

前置き。頷く彼女。

「僕は、君が好きだ」

突然の告白。するいようだが、これで誤魔化したい。でも、好きだという感情が、歯止めが利かなくなつただけで。そつ、自分で自分を弁解して。

「だから、さ。巻きこみたくは、ないんだ」

口を紡ぐ僕。沈黙。数秒か、数分か、その時間はゆっくつと過ぎていぐ。永く、そうひどく永く。

やがて口を開く彼女。

「私は廻を、愛している」

けどね、と。

「守ってくれる、んでしょ？」

笑つて、僕を見る。そして、ああ、

僕は彼女には敵わないな。

彼女は言つ。

「昔つからね

ホントに。

僕は今までのことを全て話した。幼いころの遭遇した記憶以外全てを。嘘のようなことも、彼女は信じてくれた。日も沈みかけたころ、帰ろうとした彼女は、僕を見る。

「忘れないで、あなたにはいつも、私がいることを」

目を閉じる、彼女。

「あの時のこと、覚えてる？キスした時の・・・」

一瞬、びくつとする僕。

「・・・うん」

なんとかそう返す。そして、彼女が望む行為がわかつたから。

その唇にキスをする。

少し、背伸びしたことは僕だけの秘密だ。

こうして僕たちはその日、幼馴染を超えて恋人となつた。

けれど。

待ち受ける運命は残酷だった。

僕に待っていたのは、ナツキとの幸せな時間だけではなかつた。日に日に敵の侵攻は増えていき、連日のように僕とカイザリオンは戦つていた。今までには一體ずつ倒してきたが、最近は、何体も同時に、違う次元から侵攻しようとしている。そして。

「カイザリオン、ギャザツシュカノンは！？」

すまないが、これ以上は使えない。我がリアクターが限界だ』
機体性能では遙かに高い鎧神概装。とはいえ、こちらは一機のみ。
対する奴らはまだ十体もいる。

しかも
た

奴らは異次元ではなく、会の住む二上崎に居るのだ。街並みを破壊し、燃やさんとする機械の化け物。迫り来る奴らをカイゼルブレードで薙ぎ払う。

カイゼルブレードを分離し、それぞれ両手に持ち、目の前の二体を串刺しにする。それでもつて奴らの体を裂いて、その後ろのもう一體を殺す。突如、降り注ぐ、閃光。上空からの攻撃。

「遂に決着の時が近づいてきたようだな、夜剣廻士

アルクオーネと、ナイトブレイドだつた。アルクオーネは両腕のカイゼルブレードを起動させると、残つていた、機械どもを切り裂いていった。

「邪魔されではたまらんからな、クククク・・・」

飛び掛かる、白い鎧神慨装。踊るように、舞うように。両の手よ
り、ビームの刃を振るう。避けようとする、カイザリオンだが、確
実に刃は目標を捉えていた、頭部を狙つている。

反射が間に合わない！廻は焦る。ふと、カイザリオンは左腕で庇う。一本の刃は一瞬、受け止められたが、それもすぐに破られた。切断される、左腕。カイザリオン、そして、搭乗者の廻を襲う激痛。

「痛かるうつ？だが、これからだ。本当の絶望を知つてもうう！」姿を消すアルクオーネ。痛みに打ちひしがれる、鎧神憲装のもとにすぐに現れる。だが、その手には。

ナツキが握られていた。

「ナツキッ！！」

叫ぶ僕。彼女の口が動く。

た、す、け、て。

「クククハハハハ・・・そこで見ていろ、夜剣廻よ。己の無力をなあ！！」

そして。

握りつぶす、アルクオーネ。飛び散る鮮血。けたたましい、ナイトブレイドの笑い声。

「殺してやる、殺してやるぞつーーー！」

憎しみに駆られた僕がいた。

『モード、ジエノサイド発動』

カイザリオンが言つたモードを知らないが、気にせずに廻は敵に飛び掛かる。高速で振り下ろされる、一本の刃。それはアルクオーネの両腕を切り裂いた。

「そうだ、これだ。ククク、聞いているか、夜剣廻よ。遅かれ速か

れ、彼女は死んでいた

「死ね、死ねよ…」

「ああ、死んでやろう。だが、言いたいことがある。何故、一体しかしれない、鎧神慨装が一体居ると思う?」

答えない廻。なおも続けるナイトブレイド。睨み合ひ、一機の鎧神慨装。

「鎧神慨装が一体。一つはお前のカイザリオン。そして、私のアルクオーネ・・・いや、カイザリオン」

固まる廻。笑う声が聞こえる。

「数ある世界でカイザリオンを動かせるのは、そう、ひとりだけ。夜剣廻ただひとり。ならば、私はいつたいなんだろうなあ?」

導き出される一つの答え。

「そうだ、私も夜剣廻という、存在だ」

衝撃に動けない廻。

「私は彼女を失い、考えた。ヴァーウルの次元統治を行えば、次元は重なり合い、再構築されるのではないかと。私の知る、彼女がな狂う男の声。

「私はだから、仲間を増やそうとした。それはつまり、同位体である、夜剣廻のことだ。だが、どの次元の廻も、途中で死んでいった。だが、貴様は違った」

「私と共に來い。そして、次元を統一し、彼女を、ナツキを…」

「お前」ときが・・・」

冷たい憎悪の声が廻より漏れ出る。

「ナツキの名前を口にするな・・・!」

変貌のカイザリオン。再生する左腕。黒い走行は白くなつていき、やがて。

一体のアルクオーネがそこにいた。

「殺してやるよ、夜剣廻、！」

「来い、夜剣廻・・・」

「」

再生する、敵の腕。

破壊への序曲はすでに始まっていた。

物語は突然に終局を（後書き）

実は「鎧神慨装 カイザリオン」は三部構成の内の第一部です。この第一部は取り敢えず、バッドエンドです。

そして・・・

ぶつかり合う刃。燃え盛る街。降り注ぐ、数多の侵略者。今、この世界は終局を迎えていた。

一機の鎧神戦闘機の戦い。廻と、廻。一つの同存在は戦っていた。歪んだ廻、憎しみの廻。

刃は互いの体を切り裂いた。ただ、憎しみのままに。畠田のままでに。

「死ねえ！貴様は、私では無いー！」

「そうだ、お前はナツキを殺したー！お前が・・・・・・」

狂う、異次元の廻。

「違う、違う違う違う違う違う、チガウ、ち、が、うーーーき、き、き貴様が殺したアー！貴様の無力がコロシタのだー！」

自分自身に言う、異次元の廻。

「もういい。死ねよ。むかつくんだよおーーー！」

血走る廻。迫る、異次元の廻。

「断ち切る・・・」

構える、廻。

斬り落とされる、胴。焼き消された、異次元の廻。静かに立ち、
ただ、構えたまま、動かない、廻のアルクオーネ。

戦いが終わった、三上崎は焦土となっていた。廻は街を見た。も
う、何もない。帰るべき場所も、守るべき彼女も。

世界は滅亡する。

「俺は、なんなんだろうな・・・」

廻は言った。

「守れなかつた、ごめん、ナツキ」

自分のかけていたメガネを外し、落とす。それを踏みつぶす。

「今はまだ、死ねない。君を一人にすることになるけれども・・・
決意の表情。

「変えてみせる、この螺旋を・・・運命を・・・」

壊れたメガネ。夜剣廻の象徴は消えゆく世界の空を映す。その空
は、青い、青い、空だった。

そして・・・（後書き）

次で第一部はラストです。全体的に短い「鎧神慨装」でしたが、
プロローグみたいなものなので、こんなものです。

夜剣廻には兄がいる。兄、といつても義理の、だが。でも、兄は廻に似ていた。メガネをしていないし、チビでもない。けれど、纏う雰囲気は廻と同じものであつた。

兄の名前は夜剣 悠。いい兄だ。僕とナツキ・・・まあ、僕たちは恋人なのが、僕たちを支えてくれたのは友人、そして、兄だつた。

ミステリアスで、何をやつているかはよくわからない。けれど、彼はいい人間だ。僕は彼の弟でよかつた。

「廻、飯だつてさ、母さんも父さんも、待つているぞ
「わかつたよ、兄さん」

廻る（めぐ）る世界。一時の平穏の中にある、じぐじぐ普通の家庭。この先、何が待つているのか。

刻は廻る、次元を超えて。繰り返される、夜剣廻の物語。

空は蒼く澄んでいる。それはどこの世界も同じだった・・・。

廻る（後書き）

取り敢えずの完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3252j/>

鎧神慨装 カイザリオン

2010年10月9日04時24分発行